

向学館通信

2006・01・26

進路の選択は、早めにご相談を。

中学校での学習内容の格差拡大や、大学入試が学科試験のかわりにAO入試、指定校推薦など多様な選抜方法が行われようになり、進路を決めるのが複雑になりました。

進路決定に際し、子供のモチベーションの向上を。

公立小・中学校のレベルの低さから派生する問題（2）

先月は、普通の公立中学の学習内容が易しすぎて、そのために、努力をしない生徒が増えていること、もともと優秀な子も周りの子供たちに合わせるように（あるいは引きずられるように）低いレベルに甘んじてしまうこと、その結果、大学受験ではレベルの低い所しか選べなくなってしまっていること、などが生じていることを報告しました。

難関の中高一貫校やハイレベルの私学へ入れる人数は限られていますから、大多数は公立へ行くわけです。その公立校で教える内容が低く、進度も遅いと、中学校を選ぶときに将来の大学のレベルまで決められることにもなりかねないのです。

進度の問題では、例えば、大部分の中高一貫校やレベルの高い高校では、高校2年までで、普通の高校の3年終了までの学習は終わります。高校3年は、大学入試への準備のための1年間というふうになっています。

こうした進度の差は、当然、毎日の学習時間や密度の差になっています。一年前まで同じ小学校に通っていた生徒で、中高一貫校へ進んだ生徒と、地域の公立中学へ進んだ生徒を比べると、学習時間も2～3倍の差ですし、学習内容はまったくレベルが違います。中1の間に中2の学習をどんどん進めている生徒がいる一方で、中1の範囲でも易しいことばかりやっている生徒もいる、といった具合です。

中1からすでに相当な差がつかます。これが、そのまま、あと5年間、高校3年まで続きますから、その違いは絶対的です。大学受験で太刀打ちできないのは当然です。

以上のような実態から、ほうっておけば普通の公立中学の生徒が不利になるのは目に見えています。この状態をなんとかカバーしたいと思っています。ただ、昨今、大学入試は多様で、指定校推薦などをうまく利用する方法もありますが、これはこれで早くからの作戦が必要です。こういう点も含めて、子供にこうした実態を知らせて、安易な生き方に流れないように話し合ってください。

「下流社会」のなかに入らないように

いま「下流社会」という言葉がはやっています。フリーターやニート、派遣社員など正社員になれない人（あるいはなりたくない人）が増え、正社員との年間収入が2、3倍以上の差になっています。そして、いったん非正社員になると、そこからは上がるのはきわめて困難だと言われています。こうした層では、年間200万円以下の収入しか（歳をとっても）見込めない人が多いと言われています。

いま流行している「下流社会」という言葉には、かつての「貧しい人」という意味だけではなく、意欲がないことが含まれています。昔は、その貧しさから抜け出すために人の何倍もの努力をして、人の上に立つような人々もたくさん現れました。しかし、いまの「下流」の人々は、上を目指そうという意識がとぼしく、努力をあまりしなげらなると言われています。

いまの子供たちの親の世代はバブル経済の全盛期に青春を送った世代です。この世代は、大学さえ出れば就職するのにそれほど苦労しなかつたし、会社の新規採用はほとんど「正社員」でした。だから、貧富の差が拡大し、二極化していく社会を十分理解しにくいかもしれません。

こういう話をしても、また景気がよくなれば昔のようになるのでしょうか、といったのん気な対応をしてくれる人もいます。そんな甘い時代はもう来ないのです、といっても信じられないという顔をされた方もいました。

暗い話ばかりするようで気が引けますが、明るい将来を目指すためにも、このような事態を知っていることが大事です。そして、先で暗くならないために、真剣な努力が必要です。

こういう事情も子供によく教えておくことが大切ではないでしょうか。